

## 第18回

## 第3章 現代を生きる人間の倫理

## 合理的精神の確立

## 今回学ぶこと

近代の自然観と合理的精神の特徴について理解を深め、ベーコンの経験論の思想を通じて、近代的な学問の目的や方法について考える。また、デカルトの「考える我」という思想を理解し、心身二元論について考える。さらに、経験論と合理論について、代表的な思想を学習して考えを深める。



講師

小林和久

## ■ ■ 近代科学の誕生 ～科学革命と経験論～ ■ ■

中世の学問であったスコラ哲学に代わり、近代には自然科学という新しい学問が生まれ、地動説を体系化したコペルニクスやガリレオ・ガリレイ、ニュートンなどが活躍する。その特徴は、人間の感覚と理性を頼りに、観察や実験を通じて、自然の中にある法則を見いだしていくことだった。

この新しい自然の見方は「科学革命」と呼ばれるが、その正しさを基礎づけたのが、ベーコンに始まる経験論という思想である。彼は、学問の目的を人類の福祉の増進と考え、「知は力なり」と主張する。これは、自然科学の正しい知識は、自然を支配して人類を幸せにする力をもつものである、という意味である。そして、正しい知識獲得のために、かたよった見方や思い込みである「イドラ（幻影、偶像）」を捨て、自然をありのままに観察して、それらに共通する法則を見いだす「帰納法<sup>きのうほう</sup>」を重んじた。

## ■ ■ デカルトの心身二元論 ～近代的な自然観～ ■ ■

デカルトは、確実な真理を発見するために、あえてあらゆるものを疑ってみた。その末にたどり着いたのが「われ思う、ゆえにわれあり」（私は考える、だから私は存在する）ということだった。つまり、疑いえない真理とは、現に疑い考えているこの私のこと、「考える我」だった。そして、学問の方法として、疑うことの出来ない確実なことから出発して、論理的に推理を重ねることで、新しい知識を見いだす「演繹法<sup>えんえきほう</sup>」を重んじた。

彼の思想では、「考える我（精神）」と、「考えられる対象（物体）」という、二つのも

のが相いれずに存在していることになり、心身二元論（物心二元論）という考え方が確立される。この考え方によれば、自然は、機械的に説明できるただの物質であり、人間が好きなように操作できるものになる。このような自然のとらえ方は、「機械論的自然観」と言われ、近代の自然観の基本になった。デカルトのように、理性的な思考を重んじる考え方は合理論と呼ばれる。

### ■ ■ 経験論と合理論の展開 ■ ■

ベーコンの経験論とデカルトの合理論は、自然科学の発展を支える思想になったが、感覚的経験を重んじる経験論と理性的思考を重んじる合理論は、彼ら以降もさまざまに展開していった。経験論の代表者であるロックは、人間の心は生まれつき白紙であり、観念はすべて経験から得られたものだと考えた。一方、合理論の立場になるスピノザは、デカルトの心身二元論を批判して、すべてのものは神のあらわれであり、われわれの理性は世界を永遠の相のもとに見て認識することができるという説く。

#### ◆ コラム ◆

近代哲学の代表者であるベーコンとデカルト……新しい学問や考え方を生み出した2人ですが、それぞれの人生はまったく違います。

ベーコンは23歳でイギリスの下院議員になったり、法律家としても活躍したりしますが、賄賂を受け取った疑いをかけられて、地位を失います。そして最後は、鶏に雪をつめこんで冷凍の実験をしている最中にひいた風邪が原因で、肺炎をおこして亡くなったそうです。

一方、デカルトはフランス生まれですが、32歳のときにオランダに移住します。親から相続した遺産のおかげで、生活に困ることはなかったようですが、53歳のときにスウェーデン女王に招かれて、朝5時から女王に講義をすることになります。朝寝坊の習慣があったデカルトには辛い日々だったらしく、風邪をこじらせて肺炎で亡くなったそうです。

今でも「風邪は万病のもと」と言われますが、近代哲学の代表者2人でさえ、風邪には勝てなかったようです。